

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

水谷知生
平侑子

1 はじめに

外国人観光客に対し、奈良公園は“deer park”として紹介されるなど、奈良公園周辺に生息するニホンジカは、奈良観光の興味対象として重要な位置を占めている。

春日大社の神使と位置付けられる奈良の鹿について、1465（寛正6）年に奈良を訪れた李瓊真薬は、南都八景の一つとして「春日埜鹿」を書き留め、風景の一部として鹿を認識している。近世に入り、貝原益軒の紀行文は、地理的、歴史的に客観的・記録的な見聞記と評価される（柳田1930、矢守1984）が、貝原の『和州巡覧記』（1692（元禄5）年）では、「南都は、町にも野にも、鹿甚多し」と鹿が多い状況を示し、「春日野 廣し。林多く、鹿多し。八景の一也。」と、風景の一部との認識は変わらない。その後、「和州巡覧記」を懐に益軒と同じコースをたどった土佐の安田相郎は『大和巡日記』（1838（天保9）年）で、「鹿往来人の袖たもとにもつる。鹿にあたるくたもの賣有。求て手にのせさし出せは、鹿くろう事誠に人馴たる證也。」と記している。安田に前後して奈良を訪れた者の紀行文でも、原得斎『大和廻覧道中日記』（1825（文政8）年出立）、猿渡盛章『山海日記』（1826（文政9）年出立）、氷室長翁『芳野日記』（1848（嘉永元）年出立）、清河八郎『西遊草』（1855（安政2）年出立）で、鹿が人馴れしている様子、餌を与える様子が記され、鹿と人との近距離で接する関係が記されている。風景の一部としての奈良の鹿が、近世のどこかの時点で旅行者が接する対象となったと考えられ、この関係が現在に至っている。この関係の成立は、現

代の奈良の鹿と人との関係とそれによって生ずる諸課題を考える際の起点となるといえよう。

近世の奈良において、鹿が旅行者にどのように認識されていたのかは、前述のとおり紀行文で明らかになる部分はある。しかし、その数は限られており、断片的とならざるを得ない。近世後期以降、庶民が書き残した旅日記が数多く見られ、ここでの記述に、当時の旅人の鹿に関する認識が示されている可能性はないだろうか。

山本（2006）は、近世後期以降の旅日記を大まかに三分類し、（1）名所・旧跡・寺社などの記述に重点が置かれ、自作の歌などが詠んである、（2）自己の行動を中心にしたもので、年月日・宿泊地・費用および若干のコメントが記してある、（3）諸経費を中心としたもの、としている。この（2）（3）は、行程に沿って宿泊地が簡潔に記されるほか、宿泊費などの主要な出費から場合によってはかなり少額の出費まで書き記した金銭出納帳である。高橋（2017）はこれらの記録について、「内容は至って簡潔で情報量はそれほど多くなく、それ（旅行ルート）以外の検証を行うには有効性を持たないように思われる」としながら、「さりげない注記や、ありふれた、何気ない一文に目配りするならば、その新たな性格と近世の庶民旅行者に特有の心性を抽出することもあるいは可能ではないだろうか」とする。近世後期の旅の記録は、極めて簡潔な記述のものから、記録者が訪れた名所や、数は多くないが旅で見聞きしたことが記されているものまで多様である。本稿は、近世の旅行者の風景認識を抽出する資料としてこれを取りあげ、奈良の鹿に対する旅行者の認識を読み取る資料としての可能性を探るものである。

2 資料としての道中日記の意味

本稿では1で述べた山本の分類（1）を「紀行文」、（2）（3）にあたるものを「道中日記」とし、近世後期の旅の記録として検討対象とする。近世の旅行者が宿泊場所、経費などを記載した日記形式の帳面は、「道中記」「道中日記」と題されたものがほとんどであるが、「道中記」には、実際に旅をした記録とともに、刊本の道中案内記の意味も含むことから、題名にかかわ

らず、旅行者の記録を「道中日記」と呼ぶこととする（田中2002）。

これまで、近世の伊勢参宮や西国巡礼の道中日記を資料とした研究として、小野寺（1990）が、関東地方に現存している伊勢参宮道中日記のうち81点を資料とし、伊勢参宮ルートの変遷を明らかにしている。小野寺が検討したルートでは、関東地方から伊勢神宮参拝後に戻る例は1例のみで、他は、伊勢参宮後に西国三十三箇所を一番青岸渡寺から巡拝し戻るルート（小野寺は「伊勢+西国巡礼ルート」とする）か、伊勢参宮から奈良・大坂・京都の社寺を巡り戻るルート（同「伊勢参宮モデルルート」とする）をとっていることが明らかにされている。高橋（2017）は東北地方から上方に向かった旅行者の道中日記を網羅的に収集し、129例のルートをまとめている。伊勢参宮までのルートは様々であるが、その後は西国巡礼に向かうもの（高橋は「西国巡礼型」とする）と奈良・大坂・京都を回るルート（同「上方周回型」とする）に大別され、小野寺の検討と同様の結果が示されている。伊勢参宮後、西国巡礼に向かうか、奈良・大坂・京都に向かうか、どちらのルートをとっても、奈良に立ち寄ることとなり、東日本からの伊勢参宮道中日記は、旅行者の奈良の鹿に対する認識を明らかにするための材料となる可能性がある。

田中（2002）は、東北地方や関東地方とは対照的に、近畿地方では道中日記を収録する自治体史が多くないとしつつ、畿内・近国からの社寺参詣道中日記を資料として67点収集し、参詣対象や経路などを検討している。

また、安田（2011）が奈良における案内人の研究の中で、大和について記載が認められる道中日記等を85点収集している。ここで収集された道中日記のほとんどが東日本からの伊勢参宮あるいは西国巡礼のものである。

道中日記は、記述内容が簡素であるが、巡礼ルートを明らかにする資料として用いる研究は、上述の小野寺、高橋など多くみられる。安田（2011）は、道中日記の記載から大和観光における案内人の案内賃や見物地を明らかにしている。案内人に関する記述は、雇う際に支払いが生じるので、講中への支出報告という道中日記の性格上、記述される可能性が高い情報である。一方、見物した場所の特徴であるとか、所感であるとか、個人的な記録についての分析は、高橋（2017）にわずかにみられるのみである。高橋は、松島を経由

した道中日記70点から、そこに記述される旅行者の松島での観光行動を分析している。その中で感動表現が「言語ニ述難し」といった借りてきたような言葉で表現され、主観的表現が定型化される特徴を示し、その理由として、道中日記のもつ地域情報誌的役割、社会教材的役割から、客観性を重視した表現となった点を指摘する。既往研究からは、道中日記に、近世奈良を訪れた旅行者の鹿に対する認識が多様に表現されている可能性が高いとは言い難いが、多く存在する道中日記の中には、旅行者が鹿に関するどのような情報を得たのか、市中に存在する鹿をどのような感覚を持って捉えたかを記しているものが含まれる可能性がある。

3 資料収集方法と結果

本論では、道中日記を網羅的に収集した先行研究である、小野寺（1990）、田中（2002）、三重大学人文学部塚本明研究室編（2008）、高橋（2017）、田村（2001）を参考に、自治体史の資料や個別の図書に道中日記の原文全体（翻刻）が紹介されているものを中心に調査対象とした。そのうち、記述内容から奈良を経由したことが確認できる道中日記をとりあげ、奈良での記述に鹿に関する記述が含まれる場合その記述内容を整理した。

表1に、調査対象とした紀行文と道中日記の一覧と鹿に関する記述の内容を示した。道中日記は、奈良を訪れた記録があるものについて、鹿に関する記述がないものも含めて一覧として整理した。紀行文と道中日記の区分は、宿泊した宿名あるいは宿賃などの出費の記録があるものを道中日記とし、それらではなく、俳諧紀行や見聞を書き記すことを主とした記録を紀行文とした。1でふれた山本の旅日記の三分類のうち、(1)は紀行文、(2)(3)は道中日記としている。

奈良の鹿に関する記述があった紀行文は10点であった。奈良を訪れた記述のあった道中日記の総数は203点、そのうち鹿についての記述がみられたものは75点、全体の4割弱である。図1に時系列的に鹿の記述がみられる道中日記の件数を示した。道中日記の数そのものは、1800年頃から増え始め、1840～50年代には、年間に9～11件ほどの日記が確認される年もあり、確認

表1 近世奈良を訪れた紀行、道中日記と鹿に関する記述内容
(タイトルの()は表題が不明なものの仮タイトル)

	タイトル	出生年月和暦	出生年西暦	記述内容	出生地・現都道府県	文献
紀行文						
紀行1	笈の小文 (松尾芭蕉)	貞享四年	1687	灌仏の日は奈良にて爰かしこ詣待るに、鹿の子を産を見て、此日におゐておかしければ、灌仏の日に生れあふ鹿の子哉 ．．． 旧友に奈良にてわかる。 鹿の角先一節のわかれかな		井本ら校注(1972) 『松尾芭蕉集』日本古典文学全集41、小学館
紀行2	和州巡覧記 (貝原篤信)	元禄九年	1696	興福寺の内に、八重桜甚多し。其本は皆竹の籬にてつつめり。鹿の角にて桜をすれば枯るる故也。南都は、町にも野にも、鹿甚多し。春日の神使也とて、人足を傷なはず。若鹿を殺す者は、人を殺すの罪のごとし。 ．．． 春日野 廣し。林多く、鹿多し。八景の一也。		柳田国男校訂(1930) 『紀行文集』帝国文庫第22篇、博文館
紀行3	大和めぐり (蓑笠庵梨一)	明和二年二月	1765	奈良へ入て先春日の御社に詣す一の鳥居より本社へ十八町と云り此間の風景は草にあそふ鹿樹にやとる猿左右は松柏まれにしてあせほの木のみ多し上の山を三笠といふなめり	福井	笹岡芳名編(1915) 『やまとめぐり』興風社。
紀行4	旅の道草 (保紅)	天明三年三月	1783	南都。春日社へ詣ふる道すがら、若草山に鹿の子連れ立を見る。鹿の子や若草山にはね習ひ	秋田	藤原弘 編(1982)『秋田俳書大系近世中期編』秋田俳文学の会
紀行5	大和廻覧道中日記(原得齋)	文政八年三月	1825	(三月)晦日曇 柳本 丹波市 帯解 奈良 また鹿の往来恰も家々の狗猫のごとく旅人を見れり袂にとり付裾にまとひ菓子を 乞ふいと馴へしく面白し また此辺り或堂に鐘楼あり十三鐘といふむかしある童子春日の鹿を殺し石埋になりし其父是を悲しミ供養の為に時の鐘を寄進せりとぞ云伝ふ毎朝七ツ六ツの間にうつとなり数十三うつよし	東京	原得齋著、原義正道写(1825)『大和廻覧道中日記』(国立国会図書館蔵)

紀行 6	山海日記 (猿渡盛章)	文政九 年八月	1826	(十月十五日) …鹿ハ神の使ハしめ給ふよしに て木かけ木かけに多くむれ居た るがやがて道に出来て人に馴近 づきさらに恐るゝ事なしかねて持 来ぬる菓物を出して人、与ふるに うちむれて是を食ふ…	東京	府中市立郷土館編 (1980)『猿渡盛章紀行文集』
紀行 7	大和巡日記 (安田相郎)	天保九 年三月	1838	(四月十四日) 鹿往来人の袖たもにもつる。 鹿にあたゆるくたもの賣有。求て 手にのせさし出せば、鹿くろう事 誠に人馴たる證也。	大阪	(1969)『日本庶民生活 史料集成2』, 三一書 房
紀行 8	芳野日記 (氷室長翁)	嘉永元 年三月	1848	小鹿のうちむれて、旅人にものこ ひたはるるさまいひしらすおもし ろし 陳子 秋はさの花すりならぬ我袖にな としも鹿のなれてよふらん	三重	池田末則編(2008) 『近世大和紀行集 1 巻』, クレス出版
紀行 9	西遊草 (清河八郎)	安政二 年三月	1855	(五月四日) 此辺(猿沢池)より鹿みちみちて 人に馴れ、食をなげ与ふにたのし きものなり。鹿は春日明神の前立 とやらにて、公儀より五百石の知 行をあてをこない、ねんごろにと りあつかひ、若鹿を傷つけ、また 殺すときは、其ものを下死人にす るとぞ。古しへ或子供の鹿を殺せ し為に石の下にうづめられたる 跡、いまにあり。 …石燈籠おびただしく、世にい ふごとく、南都の鹿の数と石燈籠 を知るものなしとやら。	山形	清河八郎, 小山松勝一 郎校注(1993)『西遊 草』, 岩波書店
紀行 10	さかきのかをり (橘曙覧)	文久元 年九月	1861	(九月廿一日) 十三鐘といふを見に物し春日の 御社にまうづ。鹿をちこちにたた ずみをる。 …三笠山めざむるばかりうるは し。ふもとなる芝ぐさのあをうひ きはへたるに、鹿のみつふたつ頭 うちたれてたてる。 …暁がた聞なれぬ声のしけるは 鹿にやとて頭もたげけるに、今滋 父よいま鹿の鳴けるを聞き給へり やといふ。いましもめざめたるに やとて寝どころながらに二人がみ みすましをりつつ、 しかとまだ思ひさだめねばかり にて鳴音たえゆくあかつきの空	福井	井手今滋編, 辻森秀英増 補(1983)『新修橘曙覧 全集』, 桜楓社

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

道中日記						
1	佐藤善兵衛道中記	元禄六年二月	1693	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	静岡	地方史静岡刊行会編(1988)『地方史静岡16』
2	西国道中記	宝永三年五月	1706	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	千葉	海上町史編集委員会編(1985)『海上町史研究25』
3	(西国道中日記)	享保十六年一月	1731	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	小田原市(1988)『小田原市史 史料編近世2 藩領1』
4	道中日記	寛保三年四月	1743	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	秋田	大森町郷土史編さん委員会編(1981)『大森町郷土史』
5	(小野甚平「伊勢参宮記」)	寛延二年八月	1749	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂編集委員会編(1994)『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』
6	伊勢参宮西国道中日記	宝暦三年六月	1753	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	愛媛	喜代吉榮徳(1997)伊勢参宮西国道中日記, 四国辺路研究11
7	伊勢参宮道中記	宝暦四年正月	1754	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	西会津町(2000)『西会津町史 第7巻』
8	伊勢参宮道中記	宝暦十年四月	1760	若草山 毎年正月に是をやくと也 鹿の御料場也と云	岩手	市史編さん室(2003)『二戸史料叢書 第六集「旅へのいざない」—伊勢参宮道中記—』
9	伊勢参宮・西国巡拝道中記	明和二年三月	1765	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	秋田	矢島町史編纂委員会, 矢島町教育委員会編(1983)『矢島町史 続上巻』
10	上方道中記	明和四年三月	1767	社領寺領共ニ二万五千五百石此内五百石ハ鹿料之内鹿餌料山	福島	磐梯町史編纂委員会編(1992)『磐梯町史資料編Ⅲ』
11	伊勢参宮道中記	明和五年十二月	1768	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	高島町史編集委員会編(1976)『高島町史中巻』
12	三月八日出立いせ参宮道中小つかい覚帳	明和八年三月	1771	同十九日(六月)一、三十式文 あんないせん一、式十五文 なら、さいせん、鹿のくわし	山形	寒河江市史編さん委員会編(1977)『寒河江市史編纂叢書第23集』
13	西国道中道法并名所泊宿附	安永二年五月	1773	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	矢祭町史編さん委員会(1979)『源蔵, 郡蔵日記』

14	西国道中記	安永三年六月	1774	(八月)七日 春日大明神・・石どふろふ常被 仰とふ数相知不申候 しかの数 もしれず かなどふろふもしれ ず	大分	松本政信編(1990)『西 国道中記：安永・文政』
15	参宮道中記	安永六年十一月	1777	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	山形	寒河江市史編さん委員 会編(1977)『寒河江市 史編纂叢書第23集』
16	西国道中案内 心得付き日記	安永十年正月	1781	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	福島	西会津町史刊行委員会 (2000)『西会津町史7』
17	西国道中記	天明元年閏五月	1781	(七月十二日) さる沢の池あり。魚多し、此所 にて、せんべいをかい、うをに くわせ候 ・・六道の辻・・此所まで、鹿 むかひに出候よし。	茨城	岡崎信司(1988)『西国 道中記』、つくばイセ ブ
18	西国道中記	天明三年二月	1783	石灯笼沢山なり御山広し 鹿沢 山居る春日大明神御乗馬ト云甚 大切二いたす也	福島	大越町教育委員会町史 編さん室編(1998)『大 越町史第2巻資料編1』
19	西国道中記	天明六年正月	1786	四月十八日 (大乘院)北の門江出て右へ行 ハ本社のとおりあり 此辺 町 山共二鹿多し	福島	川瀬雅男編(1972)『西 国道中記』
20	伊勢参宮道中 記	天明六年二月	1786	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	福島	いわきたろう(1993) 『伊勢参宮道中記 い わき地域学会図書15』、 いわき地域学会出版部
21	道中記	天明八年三月	1788	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	秋田	雄物川町教育委員会 (1999)『雄物川町郷土 史資料第27集』
22	い勢参宮道中 記	寛政三年正月	1791	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	福島	梁川町史編纂委員会 (1989)『梁川町史資料 集27』
23	(上方参り日 記)	寛政三年四月	1791	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	秋田	上小阿仁村(1993)『上 小阿仁村史 資料編』
24	伊勢参宮所々 名所並道法道 中記	寛政六年正月	1794	(二月二十六日) 一 十三かね 十三なる時鹿を殺し、罪により 堂を建る	宮城	阿部庄兵衛原著、阿部彰 晤(1992)『伊勢参宮所 々名所並道法道中記』
25	道中記	寛政八年三月	1796	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	静岡	浅羽町(1996)「浅羽町 史 資料編2 近世」
26	上方一見手引 帳	寛政九年正月	1797	(一月廿四日) 春日社 大社也 諸堂多し 金 燈籠 石燈籠数不知并鹿乃数 不知 御前料貳万五千石 鹿料 五百五拾石	山梨	上野利夫(2002)『(翻 刻)寛政九年の道中 日記「上方一見手引 帳」』、天理参考館報 15、天理大学附属天理 参考館

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

27	道中記	寛政十一年六月	1799	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	宮城	大郷町(1984)『大郷町史料編2』
28	伊勢参宮西国巡礼道中記抄	寛政十二年五月	1800	奈良記述あり。鹿に関する記述なし		安房先賢偉人顕彰会編(1939)『安房先賢遺著全集』
29	道中日記	享和三年正月	1803	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	青梅市教育委員会(1974)『谷合氏見聞録』
30	伊勢参宮道中記	享和四年正月	1804	(三月朔日) 此山鹿多し。人を恐れず。参詣の人菓子を調べあたへる故、参詣の人と見れば、方々より鹿むれて来る也。子供多く出て菓子をうる也。	福岡	八女郷土史研究会編(1975)『伊勢参宮道中記』
31	上方・金比羅参詣覚書	文化頃か二月	1804	(二月卅日) 春日入口鹿多し・・ 此所二ちこのかんおんト云アリ・・石こつめといふ・・ 若宮様御本社此処鹿トとふるふ多シ	茨城	川崎吉男編著(1987)『伊勢参宮日記考 上(資料篇 その1)』, 筑波書林
32	遠州秋葉・伊勢参宮道中記	文化二年十一月	1805	(十二月十二日) ・・春日四社, 若宮春日, 石燈籠・しかの数しれつ	山形	長井市(1982)『長井市史第2巻(近世編)』
33	道中参所附	文化三年正月	1806	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	世田谷区教育委員会編(1984)『伊勢道中記史料』
34	西国道中記	文化三年二月	1806	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	広島	福山城博物館友の会(1993)『西国道中記』古文書調査記録第17
35	伊勢道中日記	文化四年正月	1807	春日社 御社領二万五千石, 鹿に五百石, 御本社四所也。末社数, とうろうの数, 鹿の数を知る者なし。	茨城	土浦市史編纂委員会(1988)『土浦市史資料第1集伊勢道中日記史料』
36	名所古跡参詣覚帳	文化四年正月	1807	(二月五日) 春日様参る, やねハ本ひわたぶき, とうの数かそへがたし, しかのかすかそへかたし,	東京	世田谷区教育委員会編(1984)『伊勢道中記史料』
37	意雑記	文化四年正月	1807	(二月)五日南都名所古跡をさくり, 夫より春日大明神に拝して, 数々の鹿訓へし春日ふる	東京	世田谷区教育委員会編(1984)『伊勢道中記史料』
38	西国巡礼道中記	文化四年八月	1807	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	静岡	浜北市(1996)『浜北市史 資料編 近世3』
39	(西国道中入用帳)	文化七年二月	1810	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	湯河原町史編さん委員会(1984)「湯河原町史第1巻」

40	道中記覚	文化七年十二月	1810	(二月十日) 鹿の数と塔の数 知れず	岩手	山王海下ノ屋敷 源之助著・村谷喜一郎解説(1998)『道中記覚』, 水分公民館
41	伊勢参宮道中記	文化八年閏二月	1811	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	秋田	姉崎岩蔵(1976)『生駒藩史 讃岐出羽』, 矢島町公民館
42	(西国道中日記)	文化八年五月	1811	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	鈴木榮紀(1986)「西国道中記について」, いわき地方史研究23号
43	讃州勢劔西国道中記	文化九年正月	1812	十三鐘 大身堂菩提院と言寺有此所往昔十三相成候兎鹿を殺候ゆへ掟にて石つめの罪になり夫ゆへ十三鐘建立時を十三ツ、打ナリ 一 春日四社大明神 …また鹿何百疋有之候哉其数しらす御供所御祈禱所二而五穀の御供を頂戴仕申候せんへい買候而鹿へたべさせ申候へ者よくたべ申候	茨城	大子町史編さん委員会編(1986)『西国順礼道中記』
44	西国道中日記帳	文化九年正月	1812	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	千葉	松戸市誌編さん委員会(1971)『松戸市史 史料編(1)』, 松戸市
45	伊勢道中記	文化九年正月	1812	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	立川町史編さん委員会編(1993)『立川町史資料第5号』
46	(伊勢参宮道中記)	文化九年二月	1812	四月七日 次にさる沢ノ池きぬ懸柳有, しがころし寺つき金十三金と言, …南円堂 なら石塔しがの勝(数)しれつ,	岩手	田老町教育委員会編(1992)『田老町史 資料集(近世3)』
47	海陸道順達記	文化十年四月	1813	(五月廿八日) 途中町々二鹿多し。扱テ、春日の林しへ差かゝれば、則林の中かよりも鹿多くあつて、旅人通りけるヲ見付、追々出てくる事、町々の犬の如くぞありけり。 …扱、此処、春日様え御朱印式万千五百石附有之候。又夕外二五百石有之。是ハ鹿のかいりやう(飼料)に付ケアルよし。 …扱、いなかもの(田舎者)、今日春日明神へもふで(詣で)し頃、町々林の中かゝしか(鹿)多く出て、人々歩行いたす二つきまとい、旅人ヲなぐさめけれハ迎、歌よミ侍りしハ、…	新潟	笹井秀山著、佐藤利夫編(1991)『海陸道順達日記』, 法政大学出版局

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

48	道中記	文化十一年正月	1814	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	岩手	市史編さん室(2003)『二戸史料叢書 第六集「旅へのいざない」—伊勢参宮道中記—』
49	道中之日記	文化十一年二月	1814	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	入間市史編さん室編(1986)『入間市史 近世史料編』
50	道中日記	文化十四年三月	1817	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	金森敦子(2006)『きよのさんと歩く江戸六百里』, バジリコ
51	道中日記	文化十四年四月	1817	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	新潟	山口和・佐藤健一ほか(1993)『和算家・山口和の「道中日記」』, 研成社
52	伊勢参宮日記	文化十四年五月	1817	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福岡	永嶋源五郎勝義著, 中村晃, 國久珠編(2002)『伊勢参宮日記: 勝浦村松賀屋永嶋本』
53	伊勢参宮西国道中記	文政元年十月	1818	(十二月九日) 春日大明神 末社数多し 石燈籠数しれず 并二鹿の数不知 こうふく寺 寺領貳万貳千百拾九石 春日様 社領三千四百五十九斗余	福島	滝根町教育委員会町史編さん室編(1986)『滝根町古文書調査報告4』
54	伊勢参宮道中記	文政元年十二月	1818	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	那須貞太郎編(1980)『西川町史編集資料第11号』, 西川町教育委員会
55	伊勢参宮道中記	文政元年十二月	1818	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	内原町史研究, 創刊号(1992)
56	伊勢熊野金毘羅道中記	文政二年正月	1819	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	栃木	湯津上村誌編さん委員会(1979)『湯津上村誌』
57	道中記	文政二年四月	1819	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	三浦 寅松・佐藤 貢(2003)文政2年「道中記」卯四月十七日 六之丞, 北方風土(46)
58	西国道中記	文政三年二月	1820	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	大分	松本政信編(1990)『西国道中記: 安永・文政』
59	伊勢参宮并大社拝礼紀行	文政五年閏正月	1822	興福寺 寺領二万二千百十九石 春日社領三千四百五十九斗 灯籠数かぞえがたし鹿多し、さるも居るなり御社の廻り鉄砲へ火縄にて空鉄砲にて猿をおどすなり	群馬	金井方平編(1991)『金井忠兵衛旅日記』, あさを社

60	伊勢道中日記	文政五年正月	1822	(正月晦日) 夫より春日大明神へ趣く、其所、石燈籠、鉄燈籠、鹿の数多し。かぞへし人は、長者に成ると申すこと也。 ・・・案内の云ふ事、ちごが手習ひをして居るところへ、鹿が来る也。筆にて付けければ、其鹿しする也。そのとがにて、ちごを石こづめにしたる所也。ちご塚の句を待る。 世に残る鹿のまきげや筆始め柳風	東京	石川いさむ編(1989)『石川良助集』、松琴草舎
61	(西国三十三所巡礼記)	文政五年正月	1822	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	静岡	菊川町(1997)『菊川町史 近世資料編』
62	伊勢参宮旅日記	文政六年正月	1823	此辺より鹿数々居申候、鹿領五百石	宮城	石巻市史編さん委員会編(1990)『石巻の歴史 第9巻資料編3近世編』
63	参宮道中覚	文政六年正月	1823	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	岩手	沢内村史編纂委員会編(1986)『沢内村史資料 第1集』
64	(西国・四国巡礼道中記)	文政七年三月	1824	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	岩手	田老町教育委員会編(1992)『田老町史資料集 近世3』
65	道中泊休覚之帳	文政七年十二月	1824	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	川崎吉男編著(1987)『伊勢参宮日記考 上(資料篇 その1)』、筑波書林
66	伊勢西国道中日記帳	文政八年正月	1825	二月廿日 次に二十三児の観音、十三の鐘 此訳むかし十三児鹿ヲころしたる とか方石こづめニ也、あまりふびん故 観音ニなす也 ・・・次に春日ノ一ノ鳥居 灯籠鹿多し	東京	調布市郷土博物館(2001)、郷土博物館だより61-66
67	伊勢道中記下	文政九年正月	1826	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	立川町史編さん委員会編(1993)『立川町史資料 第5号』
68	万字覚帳	文政九年正月	1826	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	宮城	多賀城市史編纂委員会編(1985)『多賀城市史 第5巻歴史資料2』
69	伊勢参宮道中記	文政十年正月	1827	(二月十一日) 春日野 此所ニ鹿数多出 参詣ノ輩ニ食ヲ乞 誠ニヤサシク馴テヨルナリ 尤此所ニ不限ズ 諸社ノ神前ニモ共数不知	福島	梁川町史編纂委員会(1989)『梁川町史資料集27』

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

70	上方道中記	文政十年三月	1827	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	秋田	秋田県文化財保護協会編(1995)『出羽路(115)』
71	西国道中日記覚帳	文政十年閏六月	1827	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	川里村(1996)『川里村史 資料編2』
72	伊勢并大和廻道中記	文政十一年正月	1828	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	八幡町教育委員会(1973)『八幡町史資料編2』
73	道中日記帳	文政十一年正月	1828	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	藤沢市文書館編(2004)『藤沢市史料集28』
74	伊勢参宮花能笠日記	文政十一年正月	1828	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	寒河江市史編さん委員会編(1977)『寒河江市史編纂叢書第23集』
75	伊勢参宮并二大和廻り道中日記	文政十一年正月	1828	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	綾瀬市(1992)『綾瀬市史2 資料編近世』
76	伊勢参宮紀行	文政十一年二月	1828	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	藤沢市文書館編(2004)『藤沢市史料集28』
77	伊勢・長崎・善光寺行	文政十二年正月	1829	町山とも二鹿・猿多し	埼玉	根岸茂夫監修・利根川歴史研究会編(2010)『名主伊兵衛絵入道中記』利根川歴史研究会
78	道中日記	文政十二年八月	1829	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	白沢村史編纂委員会編(1991)『白沢村史資料編』
79	大和北國道中記	文政十二年十一月	1829	朝に而、奈良ニ鹿沢山也。犬ハなし。	青森	青森県文化財保護協会(2011)『野辺地町野坂忠尚家所蔵旅日記関係史料上・下』
80	道中日記控	文政十三年正月	1830	(一月廿五日)・・さる沢の池有り 此池鯉鮒多し 付きあたり右ニ衣かけ柳上ニ八重桜有り 夫より十三かね諸社多し 鹿灯笼の数知れず	東京	昭島・歴史をよむ会編(2008)『道中日記：武州多摩郡郷地村所蔵「文政十三年正月道中日記控」ほか』
81	伊勢参宮道中日記	文政十三年正月	1830	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	青梅市教育委員会(1974)『谷合氏見聞録』
82	(表題不明)	文政十三年正月	1830	(二月廿九日)鹿の数とうろふの数しれず言事也	福島	高郷村(1981)『会津高郷村史1』

83	(七種出立)	文政十三年正月	1830	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	昭島・歴史をよむ会編(2008)『道中日記：武州多摩郡郷地村所蔵「文政十三年正月道中日記控」ほか』
84	旅日記名所之覚	文政十三年正月	1830	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	群馬	小川千代子(1994)『昔の旅』里蓬社
85	(近世上方道中記)	天保二年二月	1831	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	熊本	甲斐素純編(2016)『近世上方道中記』, 皇學館大学出版部
86	さいこくの覚帳	天保二年六月	1831	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	静岡	春野町(1991)『春野町史 資料編2 近世』
87	(表紙欠損のため題不明)	天保二年十一月	1831	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	那須貞太郎編(1980)『西川町史編集資料第11号』, 西川町教育委員会
88	伊勢参宮記	天保三年正月	1832	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	梁川町史編纂委員会(1989)『梁川町史資料集27』
89	伊勢道中帳	天保三年正月	1832	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	騎西町史編さん室(1989)『騎西町史近世資料編』
90	参宮日記帳	天保四年正月	1833	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	世田谷区教育委員会編(1984)『伊勢道中記史料』
91	伊勢道中日記帳	天保四年六月	1833	春日御山之内御鹿番人案内相頼同行中二而、八拾八文遺ス	千葉	袖ヶ浦町史編纂委員会(1983)『袖ヶ浦町史史料編II』
92	伊勢参宮日記	天保六年正月	1835	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	世田谷区教育委員会編(1984)『伊勢道中記史料』
93	万字覚帳	天保六年二月	1835	とふろふノ数鹿の数 相知れ不申候	宮城	多賀城市史編纂委員会編(1985)『多賀城市史第5巻歴史史料2』
94	道中記	天保六年十二月	1835	(一月)廿三日 此所案内壺人頼二百廿四文なり 先猿沢の池絹かけの櫛九重に匂ひ桜とふる数多又鹿多し	埼玉	鶴ヶ島町(1985)『鶴ヶ島町史 近世資料編4』
95	順礼道中日記	天保七年二月	1836	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	兵庫	上野利夫(1997)天保七年「順礼道中日記(翻刻)」, 天理参考館報11
96	(道中日記)	天保九年六月	1838	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	湯川村史編纂委員会(1993)『湯川村史資料集 近世編4』

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

97	道中日記控	天保十年二	1839	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	千葉	天津小湊町史編さん委員会(1990)『天津小湊町史 史料集1』
98	参宮道草喰	天保十年五月	1839	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	岩手	渡辺絃良(1986)天保十年伊勢参りの記録 (1)(2), 獨協医科大学教養医学科紀要8, 9
99	道中小遣日記帳	天保十年七月	1839	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	座間市(1991)『座間市史2 近世資料編』
100	道中記	天保十一年二月	1840	(三月廿日) …今日参銭と繪圖、鹿ニ喰せ候はなと乞食共ニ呉候ニ式朱ト百文入申候、	熊本	宮崎平左衛門(1986)『伊勢参宮道中記天保十一年子二月』, クギヤ印刷所
101	伊勢参宮道中帳	天保十一年七月	1840	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	梁川町史編纂委員会(1989)『梁川町史資料集27』
102	伊勢道中日記	天保十二年正月	1841	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	西和夫編(1999)『伊勢道中日記: 旅する大工棟梁』神奈川大学日本常民文化叢書6, 平凡社
103	伊勢参宮日記	天保十二年正月	1841	(一月卅日) 是乃安内を取○さる沢池宋女宮 衣掛柳 児観世音 鹿殺し候 子殺墓印ニ龜石塔有 一 春日大明神 ・ ・ ・ 香取鹿島乃鹿舞り大和奈ら江参り 此時持参致候七色ノ木有	埼玉	加須市史編纂委員会(1984)『加須市史 資料編I』
104	伊勢参宮帳	天保十二年正月	1841	(閏正月五日) 此所名所古跡多し、有増分ヲ印し奈良京都ノ八重桜、さる沢の池、指かけ柳、春日八幡、二月堂大仏参り、此外鹿焼ろふ数しれずと申事也	東京	国分寺市史編集委員会(1983)『国分寺市史料集Ⅲ』
105	伊勢参宮日記	天保十二年正月	1841	(閏正月四日) 右 春日社石灯籠、銅灯籠数不知、鹿数同断	東京	世田谷区教育委員会編(1984)『伊勢道中記史料』
106	伊勢参宮道中日記帳	天保十二年正月	1841	(閏正月廿七日) 五十塔数多鹿数多燈炉数多	福島	高郷村(1981)『会津高郷村史1』
107	伊勢道中日記	天保十二年正月	1841	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	桶川市(1982)『桶川市史第4巻近世資料編』
108	万控覚帳	天保十二年閏正月	1841	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	静岡	土肥町教育委員会(1983)『土肥の古文書1』

109	西国道中記	天保十二年二月	1841	此所見物之次第、鹿数多し。・・・春日大明神・・社殿式万五千石、鹿知行五百石也、	福島	松本秀信(1968)『石川町史 下巻』
110	西国順礼道中記	天保十二年六月	1841	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	岩槻市市史編さん室(1982)『岩槻市史. 近世史料編4(地方史料下)』
111	西国四国所々泊控帳参詣所并其外日記控帳	天保十三年正月	1842	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	静岡	小山町(1991)『小山町史 第2巻 近世資料編1』
112	伊勢道中記	天保十三年十二月	1842	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	大宮町史編纂委員会(1980)『大宮町史 史料集』,小林徳司(1972)『大宮町の講.茨城の民俗11』
113	伊勢道中日記覚	天保十三年十二月	1842	(正月四日) (石とうろ・しか多し)	埼玉	志木市(1987)『志木市史近世資料編3』
114	太々講参宮道中日記帳	天保十四年正月	1843	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	藤沢市史編纂委員会(1973)『藤沢市史 第2巻』
115	伊勢太々講道中記	天保十四年正月	1843	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	藤沢市文書館(2009)『秩父坂東湯殿山記行(享保十一年)/伊勢太々講道中記(天保十四年)』
116	伊勢参宮道中記	天保十四年二月	1843	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福岡	八女郷土史研究会編(1975)『伊勢参宮道中記』
117	西国巡礼旅中控	天保十四年六月	1843	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	千葉	芝山町(1998)『芝山町史 資料集3 近世編』
118	道中入用覚	天保十五年正月	1844	奈良記述あり。鹿に関する記述なし		佐野大和(1968)『瀬戸神社』, 小峰書店
119	道中記	天保十五年三月	1844	(三月廿七日) ・・増社沢山有, 石とうろふ数不知あり, しかの居る事おびただしき事也	千葉	鍋屋嘉兵衛著,城山古文書会編(2012)『鍋屋嘉兵衛の道中記: 諸国参詣道中日記并鹿島参詣道中記』, 城山古文書会
120	伊勢参宮覚	弘化二年正月	1845	(二月)十六日天き 一 拾式文 しかにせんべい 一 四十文 案内賃 一 拾式文 さいせん 一 四十八文 奈良名所記	東京	世田谷区教育委員会編(1984)『伊勢道中記史料』

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

121	伊勢参宮日記帳	弘化二年正月	1845	(二月十九日) 春日明神江参詣仕、其所ニしか四五疋入、	茨城	岩井市史編さん委員会編(1995)『岩井市史資料近世編2』
122	西杖日記	弘化二年四月	1845	(五月)十六日 この里鹿多く人馴て犬の如し。三笠山のほとりわきて群る。旅人せんべいを袖にして投あとふ。・・・	茨城	土浦市史編纂委員会(1988)『土浦市史資料第1集伊勢道中日記史料』
123	御伊勢道中記	弘化三年十一月	1846	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	道口典次編(1991)『伊勢西国道中記』
124	伊勢参宮西国三拾三ヶ所金毘羅山善光寺道中日記覚帳	弘化三年十二月	1846	菩提院大御堂前ニ 石こつめの塚有。鹿ヲ殺候つみニテ右のせいはい被致候なり。・・・ 次にせいろう堂ニハ、御朱印二万五千石、外に鹿扶持米五百石。次に春日四社。・・・石灯笼并ニ金灯笼数不知。右灯笼預り世話仕候者八百八人ニテ前夜油三斗六升宛とぼすと言なり。御供米一度ニ一石二斗ツツ日三度都合三石六斗ツツ満るなり。それヲさけ鹿の扶持ニ致スと言なり。 南円堂八角なり・・・ 次ニ、三笠山の下ニ川の細工名物品々有也、かんしうぢう越懸ヶ石あり。鹿の数不知なり。	埼玉	嵐山教育委員会(1997)『嵐山町博物誌調査報告2』
125	上方道中記	弘化四年二月	1847	(三月廿七日) ○九番 一 南円堂 此所猿沢池、鹿多し、七堂がらん、高福寺・・・	秋田	佐藤 貢(2006)大谷・深井長之助 上方道中記、北方風土(51)
126	伊勢参宮名所旧跡西国巡礼道中日記	弘化四年五月	1847	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	岩手	前沢町教育委員会(1988)『前沢町史 下巻2』
127	神路山詣道中記	弘化五年正月	1848	(二月廿四日) 春日大明神御本社四社也御社領式万五千石八十末社御別当は興福寺此御山ニ鹿仰山ニ遊居候明神御大切ニ遊候由鹿ニ菓子杯買而為給候也・・・ 奈良之儀は名処多候間縁起並ニ案内等ニ委御尋御尤之儀ニ候灯笼之数鹿之数不相知也	栃木	阿久津重雄原著、阿久津満編述(1991)『神路山詣道中記』、随想舎
128	伊勢道中記	弘化五年正月	1848	奈良記述あり、鹿記述なし	宮城	津山町史編さん員会(1989)『津山町史 後編』

129	伊勢参宮猷立道中日記	弘化五年三月	1848	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	香川	(1972)『日本庶民生活史料集成第20巻』, 三一書房
130	伊勢道中記	弘化五年三月	1848	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	大阪	泉南市(1982)『泉南市史料編』
131	西国道中日記帳	嘉永元年六月	1848	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	荒綾文化協会(1971)『荒綾文化叢書27』
132	大日本諸州遍歴日記	嘉永元年八月	1848	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	長崎	藤原左右一(1995)『大日本諸州遍歴日記:藤原左右一の全国武者修行道中記』, 諫早郷土資料刊行会
133	伊勢西国道中日紀帳	嘉永元年十二月	1848	(一月廿三日)春日大明神四社参詣。御社領六千七百拾五石。とうろう, 鹿の数多し, 鹿之領五百石。	茨城	太田尚一(2005)「嘉永元年 伊勢西国道中日紀帳」, 常総の歴史32
134	道中記	嘉永二年正月	1849	鹿と石燈籠数知れず	岩手	沢内村教育委員会(1980)『沢内村史料第一集』
135	見聞日記	嘉永二年正月	1849	(挿絵図に表記)奈良ノ町二万千五百石ヨ内ニ鹿の扶持米五百石	群馬	高崎市市史編さん委員会編(2002)『新編高崎市史資料編8』
136	伊勢参宮覚	嘉永二年正月	1849	奈良記述あり, 鹿記述なし	神奈川	綾瀬市(1992)『綾瀬市史2資料編近世』
137	道中日記	嘉永二年閏四月	1849	(七月九日) ・・夫よりほたい院参詣。いもせ山三作しかころし, 石こつめニあふ塚有。 ・・(東大寺)山門仁王門之内大き成金とうろう有。鹿沢山なす, からのたん子, せんへいヲやる, とりつきこまる。	東京	青梅市教育委員会刊(2004)『青梅市史史料集第52号』
138	(表紙欠損のため題不明)	嘉永二年十月	1849	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	那須貞太郎編(1980)『西川町史編集資料第11号』, 西川町教育委員会
139	伊勢参宮道中記	嘉永三年正月	1850	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	(1972)『日本庶民生活史料集成第20巻』, 三一書房
140	伊勢金比羅参宮日記	嘉永三年正月	1850	(二月)廿五日 奈良は, み処八十八ヶ処, ・・古堂, 名利見処多く, 春日野の鹿, 明神の燈籠, 猿沢の池の魚, 其甚だ夥しき, 実に眼を驚かす。	群馬	金井好道(1978)『栗原順庵 伊勢金比羅参宮日記』

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

141	讃州伊勢道中日記	嘉永三年二月	1850	(三月晦日) ・・・右大仏, 春日, 興福寺, 三ヶ所共ニ鹿仰山也	熊本	山鹿市教育委員会 (1999)『嘉永三年 讃 州伊勢道中日記』, 山 鹿双書
142	伊勢参宮道中記	嘉永四年正月	1851	奈良記述あり, 鹿記述なし	東京	飯田俊郎(1997)『小野 路艸』, 小島資料館
143	道中日記	嘉永四年十一月	1851	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	福島	柳沼文英(1999)『道中 日誌 資料紹介, 郡山 地方史研究29集』郡山 地方史研究会
144	伊勢太神宮金 毘羅大権現道 中日記	嘉永五年正月	1852	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	群馬	池田村史編纂委員会 (1964)『池田村史』
145	伊勢太々道中 記	嘉永五年正月	1852	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	茨城	道口典次編(1991)『伊 勢西国道中記』
146	道中日記	嘉永五年正月	1852	(一月廿二日) 次ニ春日大明神, 金石とうろう 数知ス, 鹿の数多シ, 御朱印二 萬五千石, 同鹿料として五百石 有と言,	埼玉	所沢市史編さん委員会 編(1983)『所沢市史 近世史料2』
147	道中日記帳	嘉永五年正月	1852	(二月廿日) 春日太明神御朱印二万五千石 社地ニ古跡無限事 鹿扶持料五百石、目附人六拾四 人 此内ニ而案内致候事也	神奈川	長田かな子(1988)『近 世相模原地域農民の旅 (2), 相模原市立図書館 古文書室紀要11』
148	伊勢西国道中 記	嘉永五年二月	1852	(三月十六日) 石とふ路数鹿の数知れず	秋田	佐藤 貢(2006)大谷・ 深井一郎氏所蔵文書 「道中記」, 北方風土 (52)
149	伊勢太々金毘 羅道中記	嘉永五年二月	1852	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	埼玉	小川町史編さん委員会 (1982)『小川町史上巻』
150	道中記	嘉永五年二月	1852	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	秋田	平鹿町中央公民館編 (1991)『平鹿町史料集 2』
151	道の記	嘉永五年三月	1852	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	東京	世田谷区教育委員会編 (1984)『伊勢道中記史料』
152	伊勢道中記	嘉永五年十二月	1852	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	群馬	高崎市市史編さん委員 会編(2002)『新編高崎 市史資料編8』
153	道中記	嘉永六年三月	1853	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	岩手	北上市(1986)『北上市 史第12巻 近世(10)』
154	(伊勢参宮記 并金比羅参詣 道中記)	嘉永六年三月	1853	奈良記述あり。鹿に関する記述 なし	岩手	市史編さん室(2003)『 二戸史料叢書 第六集 「旅へのいざない」— 伊勢参宮道中記—』,

155	伊勢道中記	嘉永六年五月	1853	鹿子の数不知筆ニ尽シ難し	宮城	秋保町史編纂委員会編(1975)『秋保町史資料編』
156	伊勢西国道中録	嘉永六年五月	1853	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	千葉	川名登(1989)庶民の旅、『海上町史研究29』海上町史編纂委員会編(1989)
157	四国八拾八ヶ所日記帳	嘉永七年正月	1854	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	岩槻市市史編さん室(1982)『岩槻市史. 近世史料編4(地方史料下)』
158	参宮道中諸入用覚帳	嘉永七年正月	1854	(二月十二日) 一 十式文 鹿の喰 一 六文 案内ちん	神奈川	秦野市(1983)『秦野市史第3巻近世史料2』
159	西国順拝名所記	安政元年三月	1854	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	滋賀	青柳周一(2003-4)自芳尼「西国順拝名所記」(1)(2), 滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要36, 37
160	西国道中付	安政二年二月	1855	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	和歌山	中津村史編纂委員会編(1993)『中津村史史料編上巻』
161	道中日記覚帳	安政二年十二月	1855	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	栃木	茂木町史編さん委員会(1998)『茂木町史第3巻 史料編2 近世』
162	金毘羅参詣道中日記	安政三年二月	1856	(三月)廿三日 ・・・春日大明神様へ参詣, 鹿あまた居ル, きらずを遣ル, 角細工を買, ・・・	静岡	山本光正(1984)史料紹介「金毘羅参詣道中日記」, 国立歴史民族博物館研究報告4巻
163	道中日記帳	安政三年二月	1856	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	福島	田島町史編纂委員会編(1977)『田島町史第4巻民俗編』
164	西騎旅録	安政三年四月	1856	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	新潟	両津市誌編さん委員会編(1984)『両津市誌資料編』
165	西国道中日記帳	安政三年五月	1856	(七月十日) 一条院御門主知行千五百石, 大乘院の宮知行五百石, 此辺にて鹿猿多し,	千葉	川名登(1989)庶民の旅、『海上町史研究29』海上町史編纂委員会編(1989)
166	伊勢西国道中記	安政三年十二月	1856	(一月廿八日) 春日明神御社とふろふ数しれづ御朱印式万五千石鹿の不持(編者注:扶持)五百石	埼玉	狭山古文書勉強会編(1990)『伊勢西国道中記』

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

167	道中日記扣エ	安政四年正月	1857	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	静岡	静岡古文書研究会 編(1999)『政えんどのの旅日記：安政四年：政右衛門・道中日記扣エ』, 静岡古文書研究会
168	道中記	安政四年正月	1857	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	岩手	市史編さん室(2003)『二戸史料叢書 第六集「旅へのいざない」—伊勢参宮道中記—』,
169	伊勢参宮道中日記	安政四年正月	1857	(二月朔日) さる沢のいけきぬかけ柳かささぎの橋七堂からんしかことふろふかず多し	東京	福生市史編さん委員会編(1991)『福生市史資料編近世3』
170	伊勢太々西国三拾三所順道中日記	安政四年正月	1857	(三月二日) ならにて鹿を取物ハ石せめ也春日社仕候 千べんかし十式文かい候	埼玉	騎西町教育委員会(1985)『騎西町史 近世資料編』
171	伊勢道中日記	安政四年正月	1857	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	加藤誠三(1992)伊勢道中日記, 川口史林47,48
172	伊勢参宮道中記	安政四年正月	1857	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	新潟	村林正美(1998)中澤松太郎筆記『伊勢参宮道中記』, 愛知文教大学論叢(14)
173	道中日記帳	安政四年正月	1857	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	青梅市教育委員会(1974)『谷合氏見聞録』
174	伊勢道中万控帳	安政四年正月	1857	奈良記述あり, 鹿記述なし	神奈川	平塚市(1984)『平塚市史4(資料編近世3)』
175	伊勢参宮道中袖日記	安政四年二月	1857	(三月廿八日) ・・夫より三笠山林鹿名物, 火打やき餅名物也・・	茨城	石山 秀和(2016)結城商人の伊勢道中日記について, 立正大学人文科学研究所年報54号
176	(道中日記)	安政四年二月	1857	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	山形	太田昇解説(1995)高山四郎左衛門道中記
177	伊勢参宮道中記	安政四年十二月	1857	(三月六日) 春日社二石燈籠・かね燈籠多し, 燈籠の油一廻り附る二三石六斗, 鹿多し,	埼玉	所沢市史編さん委員会編(1983)『所沢市史近世史料2』
178	(伊勢参宮並諸国神社・仏閣礼拝道中記)	安政五年二月	1858	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	岩手	田老町教育委員会編(1992)『田老町史 資料集(近世4)』
179	道中日記手控	安政六年正月	1859	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	埼玉	岩槻市史編纂委員会(1982)『岩槻市史 近世史料編 地方史料(下)』

180	伊勢参宮日記帳	安政六年正月	1859	奈良記述あり，鹿記述なし	神奈川	座間市(1991)『座間市史2 近世資料編』
181	伊勢参宮并熊野三社廻り金比羅参詣道中道法附	安政六年二月	1859	四月九日)・・・鹿多し 鹿ノ扶持式百石鹿守式十三人 名所多し	岩手	市史編さん室(2003)『二戸史料叢書 第六集「旅へのいざない」—伊勢参宮道中記—』
182	伊勢参宮道中記	安政六年十一月	1859	(十一月)次ニ猿沢池，絹懸柳，次二十三かねあり，此所石燈籠の数，鹿の数知れず，・・・	福島	鎌田道隆(2009)安政末年伊勢参宮道中記，奈良史学26号
183	(西国巡礼道中日記)	安政七年正月	1860	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	利根町(1993)『利根町史5 社寺編』
184	道中日記帳	安政六年正月	1860	(二月七日)鹿多居ル	埼玉	戸田市立郷土博物館編(1995)『戸田市史研究』10
185	道中日記扣エ	万延元年七月	1860	(八月十五日)御朱印老万五千石外に鹿扶持五百石，灯籠は数知れず，兎角鹿は我々の趾(後)を慕ひ，せんべいくわせ前後に□(あつ)まりて漸々欠萩(駆抜)行。	福島	松本秀信(1968)『石川町史(下)』，石川町教育委員会
186	伊勢参宮路用帳	文久元年十二月	1861	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	猿島町史編さん委員会(1995)『猿島町史資料編近世別巻』
187	参宮道中日記	文久元年十二月	1861	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	群馬	池田村史編纂委員会(1964)『池田村史』
188	御伊勢参宮道中記	文久二年正月	1862	(二月十八日)神領二万五千石内三百石鹿の手当領なり・・・数ト夜燈の数をかぞへ難し	山形	立川町史編さん委員会編(1993)『立川町史資料第5号』
189	御伊勢参宮道中記	文久二年正月	1862	春日様関東ひたちの国より鹿に乗り御出被遊候・・・鹿数ト夜燈の数をかぞへ難し	山形	立川町史編さん委員会編(1993)『立川町史資料 第5号』
190	伊勢参宮道中記	文久二年正月	1862	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	栃木	塩原町誌編纂委員会(1980)『塩原町誌』
191	伊勢道中日記	文久二年正月	1862	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	圭室文雄(1977)「伊勢道中日記」について，茅ヶ崎市史研究2
192	伊勢参宮致道中覚之帳	文久二年正月	1862	(二月十三日)・・・三笠山と申所宜敷景なり，此所ニ休茶屋有，鹿のつの細工物見せ多分ニ御座候，此角の義ハ秋ニ相成候得ハ鹿の角切取右角ニ御経文有之，其後細工ニ致し候，右角切取候儀者秋さかり	東京	墨田区教育委員会社会教育課(1989)『墨田区古文書集成(3)』

近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性

				付候節つの有之候而者けか有之候間切取申候、其節外の山へ逃し候、鹿者角のこり候、・・・御朱印式百五十石 別ニ五百石鹿領御座候		
193	伊勢両宮大々御神楽旅中之日記	文久二年二月	1862	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	群馬	小川千代子(1995)『昔の旅』里蓬社
194	参宮拝礼帳	文久二年六月	1862	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	川崎吉男編著(1987)『伊勢参宮日記考. 上(資料篇 その1)』, 筑波書林
195	参宮道中諸用記	文久二年八月	1862	(十月廿四日) 一 三拾七文 鹿へ せんべ	秋田	本荘市(1988)『本荘市史 史料編4』
196	(西国金毘羅道中日記)	文久二年十二月	1862	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	新潟	西岡欣一(1988)五十嵐三良の金毘羅参り「道中記」, 阿賀路26
197	伊勢道中日記	文久三年正月	1863	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	茅ヶ崎市史編纂委員会(1977)『茅ヶ崎市史 第1巻』
198	道中日記帳	文久三年正月	1863	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	茨城	川崎吉男編著(1987)『伊勢参宮日記考. 上(資料篇 その1)』, 筑波書林
199	伊勢参宮道中記	文久三年七月	1863	(七月廿五日) 三かさの山有 通りしか数あり	福島	梁川町史編纂委員会(1989)『梁川町史資料集27』
200	伊勢ヨリ金毘羅迄道中記	文久四年正月	1864	(二月四日) 一 三拾八文 鹿喰料	千葉	習志野市教育委員会(1993)『習志野市史 第三巻史料編2』
201	旅中日用記	元治元年七月	1864	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	東京	狛江市(1979)『狛江市史料集 第10』
202	道中日記帳	慶応二年正月	1866	奈良記述あり。鹿に関する記述なし	神奈川	長田かな子(1988)『近世相模原地域農民の旅(2) 相模原市立図書館古文書室紀要11』
203	道中帳	慶応二年正月	1866	(三月二日) ・・・次二 とうろうト鹿ハ何二ほど有之候も不知数 此数をするものあるならば 何二事も願事為叶可申ト春日様ノ御せうがん也	岩手	市史編さん室(2003)『二戸史料叢書 第六集「旅へのいざない」—伊勢参宮道中記—』

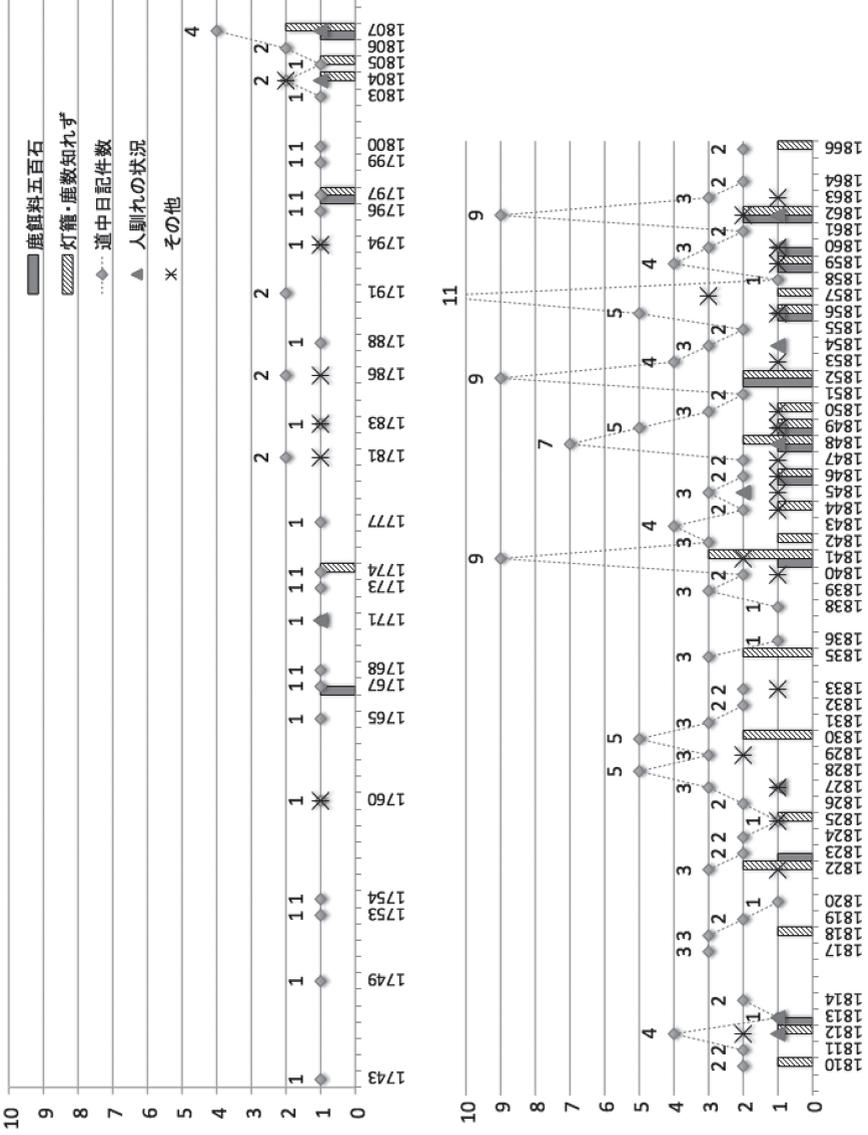


図1 道中日記での鹿に関する記述の出現状況 (件数)

されている道中日記の数はこの時期が圧倒的に多い。

鹿に関する記述は、大きく以下の4つの種類に分けることができる。図1を見る限り、4つの種類のいずれもが18世紀後半には現れ、幕末まで記述がみられ、特定期間に特定の記述がある傾向は認められない。

(1) 鹿餌料五百石

1807(文化4)年の『伊勢道中日記』にある「春日社 御社領二万五千石、鹿に五百石」(No.35)といった表現にみられる、春日社の社領のうち500石が鹿の餌料となっているという記述である。道中日記全体で16例みられ、春日社の社領が25,500石(No.10)、21,500石(No.47, 135)、15,000石(No.185)、6,715石(No.133)、鹿の餌料が550石(No.26)、300石(No.188)、200石(No.181)となっているものもあり、数値のぶれはあるが、25,000石と500石とする例が6例と最も多い。紀行文でも「五百石の知行をあてをこない」(紀行No.9)との記述がみられる。

(2) 鹿と灯籠の数知れず

鹿の数が多いいことを記述したものについて、単に「鹿多し」といった記述がなされるものもあるが、鹿の数が多いいことと春日社の灯籠の数が多いいことを併記しているものが多く、道中日記で33例ある。中には灯籠の数と鹿の数を「かぞへし人は長者に成ると申すこと也」(No.60)と奈良での伝承を紹介している例もある。紀行文では「石燈籠おびただしく、世にいふごとく、南都の鹿の数と石燈籠を知るものなしとやら」(紀行No.9)との記述があり、19世紀半ばすぎには、鹿の数と灯籠の数が数え難いことは案内人に説明されるまでもなく、周知の話であったようだ。

(3) 人馴れ

「弐十五文 なら、さいせん、鹿のくわし」(No.12)など、鹿の餌への支払いの記述、「人を恐れず、参詣の人菓子を調べあたる」(No.30)など、鹿が人に馴れている状態を示している記述が、道中日記で合わせて14例を数える。これには定型化した表現はみられない。

(4) その他

鹿を誤って殺した十三歳の子が石子詰の刑罰を受けたという説話に関する

ものが道中日記で11例みられ、これは紀行文No.5, 9でも紹介されている。春日の祭神である武甕槌命が鹿島から鹿に乗ってきた伝承を紹介するものが2例みられる。その他、鹿が多いという客観的記述も数多くみられる。そのうち鹿を見た具体的な場所が記述されているものは、「春日入口鹿多し」(No.31),「猿沢池、鹿多し」(No.125),「大仏、春日、興福寺、三ヶ所共に鹿仰山也」(No.141)がある。また、紀行文では「若草山に鹿の子連れ立を見る」(紀行No.4)がみられる。

また、鹿の角切りに言及したものが1例 (No.192) みられる。

4 鹿に関する記述の特徴

奈良を訪れた記録のある道中日記のうち、4割弱に鹿に関する記述があり、その割合は大きい。内容は、鹿の数が多いことについて、春日大社の灯籠と鹿の数は数え難いほど多いと定型的な表現をとるものが33件と圧倒的で、春日社の社領と鹿の餌料についてふれたものが15例、鹿が人馴れしていることを示すものが14例を数える。

このうち、灯籠と鹿の数、春日社の社領と鹿の餌料、11例あった十三鐘・石子詰に関する記述は、どれもある程度定型化した内容となっている。安田(2011)は、1693(元禄6)年から1866(慶応2)年までの85点の道中日記の記述から、奈良見物に案内を雇っていることが確認できるものが51点あるとしている。これによれば少なくとも6割が案内人とともに奈良見物に出向いている。道中日記に、案内を雇ったあるいは案内賃を支払ったと明記されていないものでも案内をとった可能性はあり、実際にはそれ以上の割合で案内人を雇っていることが想定される。定型化された表現は、案内人による定型化した案内を記述したと考えられる。案内人の話を聞いたことにより、道中日記に類似した表現が出てくることは、山田が東大寺釣鐘についての記述5例について検討し、指摘している(山田1992)。これらの定型化された表現の出現頻度は、図1を見る限り時期による差異は見られない。このことは、江戸中後期を通じて、定型的な表現、つまり案内人の説明する内容がさほど変化しなかったことを示しているといえよう。鹿についての案内人による説

明は、18世紀後半から100年あまりの期間、大きな変化なく受け継がれていたであろう。

一方で、鹿が人馴れしている状況についての記述は、「此山鹿多し。人を恐れず。参詣の人菓子を調へあたへる故、参詣の人と見れば、方々より鹿むれて来る也。子供多く出て菓子进行る也。」(1804(享和4)年, No.30), 「せんへい買候而鹿へたべさせ申候へ者よくたべ申候」(1812(文化9)年, No.43), 「林の中かよりも鹿多くあつて、旅人通りけるヲ見付、追々出てくる事、町々の犬の如くぞありけり。」(1813(文化10)年, No.47)など、定型化した表現はみられず、旅行者が見聞きしたことを多様に表現している。鹿の人馴れに関する記述は、鹿と人との関係についての旅行者の受けとめを率直に示していると言えよう。そして、人馴れに関する記述が道中日記で14例確認されること、紀行文では1825年以降のものにはNo.10を除き5例で確認されることから、人馴れ、餌やりという事象に対して、旅行者が高い関心を持っていたことを示している。

案内人によって語られる奈良の鹿に関する言説のうち、旅行者にとって印象深い事項が道中日記に記述されたと考えられ、まず、鹿の数が多くことは印象深く、それを春日社の灯籠の数と対比させて語ること、さらには数えられれば長者になれるという説話に面白みを感じたのであろう。さらに、鹿が餌料として五百石与えられている処遇についても意外性という点で印象が大きかったと言える。そして、実際に歩く中で、鹿が人馴れしていることについて実感し、多様な表現で道中日記に記録を留めたものであろう。

5 道中記の記述からみる奈良の鹿の「管理」

(1) 春日社・興福寺領

春日社・興福寺領について、道中日記では25,000石と記されている例が多いが、「寛文朱印留」にある寛文5(1665)年の朱印状では、春日社領并興福寺領は「式万千百拾九石五斗余」とされており(国立史料館編1980)、概ね事実に基づいた紹介といえる。21,500石と記述している2例もあり、この例はこの朱印状に近い数字である。春日社・興福寺領に関しては、奈良大仏

前に店を構えた版元である絵図屋庄八が江戸後期に出版した案内書『改正絵入南都名所記』¹⁾に記されており、安永三年版(1774)では21,119石5斗余(内17,913石余は興福寺領, 1,554石余は春日社領), 第二版の寛政九年版(1797)以降では26,246石7斗余(内22,019石5斗は興福寺領, 3,405石9斗余は春日社領)と紹介されている。後者の石高は道中日記No.53とNo.59でそのまま紹介され, 案内書を参考に道中日記に記入したものと考えられる。多くの道中日記では, 案内人が案内する25,000石を旅行者が記した可能性が高い。一方でセットで記述されている鹿の餌料に500石(550石, 300石, 200石)があてがわれているという部分については, その根拠を見出すことは難しい。

(2) 鹿の「餌料」

幡鎌(2010)は, 奈良の鹿と人との近世までの関係について詳細に記している。寺社領と鹿の餌料に関しては, 落語の演目「鹿政談」で, 春日社・興福寺に対して, 幕府から1万3千石の禄がでており, そのうち3千石が鹿の餌料となっているという内容について, 興福寺に一万数千石の寺領が与えられていることは事実だが, 興福寺領のなかから三千石を鹿の餌料にしていたことは事実ではない, と整理している。

落語「鹿政談」は, 豆腐屋が誤って鹿を殺して罪に問われるが, 奉行が鹿を犬として, 豆腐屋を無罪放免とする内容である。この噺は, 講談に取材したと言われる(飯島編1973)。「鹿政談」あるいはそれに類する話がいつから演じられていたのかは, 六代目三遊亭円生は「嘉永年間には既に高座へかけていた」(飯島ら編1972)と語っている。また, 正岡容は明治期に瘦々亭骨皮道人の作った落語と紹介している(正岡1946)が, その起源は必ずしも明らかではない。道中日記には18世紀中頃から「社領寺領共ニ二万五千五百石此内五百石ハ鹿料之内鹿餌料山」(1767(明和4)年, No.10), 「御前料式万五千石 鹿料 五百五拾石」(1797(寛政9)年, No.26)という記述が認められ, 鹿の餌料については, 奈良の巷間で語られていた, あるいは案内人の話が講談, 落語に取り入れられたと考えてよいだろう。

瀬賀（2010）は、鹿政談の噺の原話をなしていると思しき説話として『説教譬喩因縁談』（花生空観述、大高文進記1883）に収められている「南都鹿殺シノ事」をあげる。この話では、豆腐屋が誤って鹿を殺すことは鹿政談の噺と共通だが、殺したのは春日の使いの鹿ではなく山鹿であるため無罪という展開になっている。この説話では、「春日ノ使ヒ者ノ鹿ハ五百石ノ知行ヲ付テアル故ニ盗ミ喰スル筈ハナイ」と奉行が語る。また、1891（明治24）年頃の翁屋さん馬の落語「鹿政談」口演録では、「鹿には上（かみ）よりも五百石の餌料が下ツて有る」と演じられており（翁屋さん馬口演・丸山平次郎速記1891）、これらは、餌料を500石とする多くの道中日記の記述と一致している。

ところが、講談師邑井吉瓶による1890（明治23）年頃の講談「鹿政談」の口演録では、春日社領は1万5千石で、1万2千石は宮司48名の社家がこれを領し、残額3千石は庫方より鹿の餌米として玄米で頂戴する、と語られる（邑井吉瓶口演・青山浅次郎速記1890）。同時期、1891（明治24）年の二代目禽語樓小さんの落語「春日の鹿」の口演録では、「奈良の朱印といふ者は徳川政府の折柄には一萬三千石といふ社領で一萬石は宮司社家の領で三千石は何んだといふと鹿の餌料鹿の飼料を宛行はれ置きます程で」（暉峻ら編1980）と語られ、餌料を3,000石とする流れが生まれている。

その後、柳亭燕路による1901（明治34）年頃の「鹿ころし」口演（柳亭燕路口演、翠雨生速記、1901）、四代目三遊亭圓喬の「奈良の鹿」（今村次郎編1907）、初代三遊亭圓歌の「春日の鹿」（三遊亭円歌講演1911）の口演ではいずれも餌料の石高は示していない。昭和の名人、六代目三遊亭圓生は「鹿政談」で、「春日神社の宮司、興福寺、これらの生活費が一万石で、あとの三千石は鹿の餌料になっております」と演ずる。円生は、禽語樓小さんの速記を読んで、それを中心にまとめたと述べており（飯島友治ら編1972）、ルーツは二代目禽語樓小さんに求めることができる。また、上方落語の三代目桂米朝は「興福寺へ幕府から一万三千石の禄が出てましたが、そのうち、三千石が鹿の餌代というのでっさかい」と演ずるが、鹿政談を「六代目三遊亭円生のを底本にさせていただいて演りはじめました」（桂米朝2014）

と語り、小さん－円生のお話を引き継いでいる。

鹿の餌料は道中日記では500石と記述される例が多いこと、明治初期に紹介されている説話では500石としていること、落語でも500石として演じたものがあつたことから、3000石は、明治以降、講談、落語の中で誇張された数字であつたと考えられる。一方で、そもそも鹿の餌料にあたるものが存在し、鹿の管理の一環として餌やりが行われていたことが事実かは検討の必要がある。

(3) 鹿の組織的管理

1846(弘化3)年の「伊勢参宮西国三拾三ヶ所金毘羅山善光寺道中日記覚帳」(No.124)に「(春日四社への)御供米一度ニ一石二斗ヅツ日三度都合三石六斗ヅツ満るなり。それヲさけ鹿の扶持ニ致スと言なり。」という記述が見られる。御供米を鹿の餌代にあてていたと読み取ることができ、鹿に対する組織的な給餌が行なわれていた可能性を示唆する。

また、1852(嘉永5)年の「道中日記帳」(No.147)には、「鹿扶持料五百石、目附人六拾四人 此内ニ而案内致候事也」とあり、鹿に関する管理人的な役割を担っている者が相当数いたことが推察される。また、1859(安政6)年の「伊勢参宮并熊野三社廻り金比羅参詣 道中道法附」(No.181)では、「…鹿多し 鹿ノ扶持式百石鹿守式十三人」と記述されている。「鹿守」は、油坂又右衛門が累代、興福寺一臈代(下臈分の代表者)の命に従つて病鹿の収容や死鹿の処理にあたっていたとされ(水谷2005)、特定の役職を指す。道中日記の記述は、鹿守とともに作業を行う者が20名以上いたことを示しているのであろうか。

鹿守は、病鹿の収容や死鹿の処理についての役割を担っており、先にあげた組織的な給餌を行っていた者とは別の者と考えてよいのか、検討に必要な資料は乏しい。鹿の餌料に関する記述は、案内人による定型的な紹介によると思われる記述が多いものの、道中日記に繰り返し現れ、1例ではあるが餌料が御供米によって賄われていたという、定型的ではないより具体的な記述もみられる。これらの事実は、近世に、鹿に組織的に給餌する何らかの体制があつたことを示唆する。

(4) 鹿管理集団と案内人

先に紹介した1852（嘉永5）年の「道中日記帳」（No.147）で、「鹿扶持料五百石、目附人六拾四人 此内二而案内致候事也」と、鹿の「目附人」の中に案内人がいたとの記述がある。また、1833（天保4）年の「伊勢道中日記帳」（No.91）では、「春日御山之内御鹿番人案内相頼同行中二而、八拾八文遺ス」と、「御鹿番人」が案内人となっていることが記されている。これらの記述からは、鹿の管理にあたる何らかの集団は、旅行者の案内をも行っていた可能性を指摘しておきたい。

6 おわりに

道中日記及び紀行文での奈良の鹿の記述から、当時の旅行者が奈良の鹿に対して抱いた印象について概観した。鹿に関する記述には、案内人によって語られた情報を記述した定型的なものが多くみられたが、鹿の人馴れについての記述は、旅行者の感覚が直接的に表現されており、当時の鹿と人との関係を検討する上で有効な情報となることが確認された。

定型的な表現は案内人による説明によっていると考えられるが、道中日記に残された記述の内容に変化がないこと、時期による出現頻度の偏りが見られないことから、江戸中後期を通じて案内内容に大きな変化がなかったことを示している。

道中日記での記載は、鹿の餌料が存在し、鹿管理の一環として給餌を行う何らかの体制があったことを示すが、その事実関係についてはさらに検討を要する。

道中日記は、これまで旅行者の行程や行動を検討する資料として用いられてきたが、記述内容を詳細に検討することで、旅行者の風景認識を確認する資料として、また、奈良において、旅行者と鹿との関係、奈良の鹿の管理状況を明らかにする資料としての価値をも有していることが示された。

今回検討した道中日記は、自治体史などで翻刻されているものをできるだけ収集したが、田村（2001）は、埼玉県越生町で確認することのできる道中日記は1757（宝暦7）年から1910（明治43）年まで56点を数えるという記述

から、お伊勢参り道中日記は無数に存在しているとする。道中日記には支出記録が簡潔に記されているだけのものも多いが、記録者の見たもの、聞いた話が記載されている日記から得られる情報は少なくない。道中日記が無数に存在することは、その資料としての可能性を示している。

注

- 1) 『改正絵入南都名所記』は、白石（2005）によれば、江戸時代だけで八版が数えられる。興福寺領・春日社領の石高が、初版と考えられる安永三年版（1774）と第二版の寛政九年版（1797）以降では違っていることが指摘されている。前者では、21,119石5斗余、後者では26,246石7斗余となっており、前者が『寛文朱印留』と同じ数値である。

文献

- 飯島友治編（1973）『古典落語 第二期 第四巻』、筑摩書房
飯島友治ら編（1972）『円生全集 第1巻（下）』、青蛙房
今村次郎編（1907）『滑稽五面相』、すみや書店
翁屋さん馬口演・丸山平次郎速記（1891）鹿政談、百千鳥第3巻第3号
小野寺淳（1990）道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷－関東地方からの場合－、筑波大学人文地理学研究14、pp.231-255
桂米朝（2014）『米朝落語全集 増補改訂版 第四巻』、創元社
国立史料館編（1980）『寛文朱印留 下』、東京大学出版会
三遊亭円歌講演（1911）『曾我廼家喜劇円歌新落語集』、三芳屋書店
白石克（2005）『ならめいしょえづ（奈良名所絵図）』を読む、帝京史学21、pp.125-159
高橋陽一（2017）『近世旅行史の研究』、清文堂
田中智彦（2002）道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣、交通史研究49、pp.19-45
田村貞雄（2001）近世のお伊勢参り道中日記一覧、地方史静岡29、pp.57-75
瀬賀正博（2010）落語「鹿政談」に見る名判官像、法史学研究会会報14、pp.74-83
暉峻康隆ら編（1980）『口演速記 明治大正落語集成 第二巻』、講談社
花生空観述・大高文進記（1883）『説教譬喩因縁談』、永田文昌堂
幡鎌一弘（2010）「神鹿の誕生から角切りへ」、『奈良の鹿 「鹿の国」の初めての本』所収、京阪奈情報教育出版

- 正岡容（1946）『寄席行灯』柳書房
- 三重大学人文学部塚本明研究室編（2008）『道中記に描かれた三木里～曾根次郎坂太郎坂：二五〇点の旅の記録から』
- 水谷友紀（2005）近世奈良町と興福寺－死鹿処理からみた－，洛北史学7，pp.45－69
- 邑井吉瓶口演・青山浅次郎速記（1890）鹿政談，花筐18号，pp.1－13
- 安田真紀子（2011）近世大和観光における案内人の史的研究，奈良史学28，pp.38－68
- 柳田國男（1930）『紀行文集』（『帝国文庫』22），博文館
- 山田浩之（1992）近世大和の参詣文化－案内記・絵図・案内人を例として－，神道宗教146，pp.1－26
- 山本光正（2006）旅から旅行へ：近世・近代の旅行史とその課題，交通史研究60巻，pp. 1-16
- 矢守一彦（1984）『古地図と風景』，筑摩書房，p.103
- 柳亭燕路口演，翠雨生速記（1901）鹿ころし，文芸倶楽部7巻10号，pp.120－127

